

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語学習者の中間言語に関する研究
Author(s)	フィオナ ターバット,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 17期 : 123 - 129
Issue Date	2003-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038882">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038882</a>
Right	
Relation	



# 日本語学習者の中間言語に関する研究

フィオナ・ターバット

## はじめに

言語学習者であるあなたは普段何語でコミュニケーションしているだろうか。日本語？自分の母語？それともそのどちらでもない？日本に住み、日本語を学びながら、日々の生活を送っているあなたは日本語でコミュニケーションをとっていると思ったことがあるだろう。しかし、実はあなたが今使っている言語は日本語ではない。留学生のあなた方は別の言語を使っているのだ。その言語とは中間言語である。

ある言語を勉強しようとする時、必要となるのは何だろうか。言語学習者はもちろんすぐに、文法、語彙、発音などと言い出す。だが、言語を勉強するというのは言葉だけでなく、ほかに考えなければいけないことが多くある。例えば、文化、宗教、歴史、日常生活などこれら全部がその言語の土台となっている。言語というものはただの言葉ではなく、コミュニケーションそのものだ。日本語学習者にとってこれが大きなポイントになる。

このレポートの目的となっているのは、分かり易いスタイルで例を出しながら、初心者が読んでも分かるように中間言語を紹介することである。このレポートの中の例は、母語が英語の日本語学習者である私が考えたものだ。本レポートはアンケートや調査を行うことはしなかった。

## 中間言語って何ですか。

「中間言語」という言葉は言語学の用語である。文字通り、真中の言葉。具体的に；

中間言語 (Interlanguage)

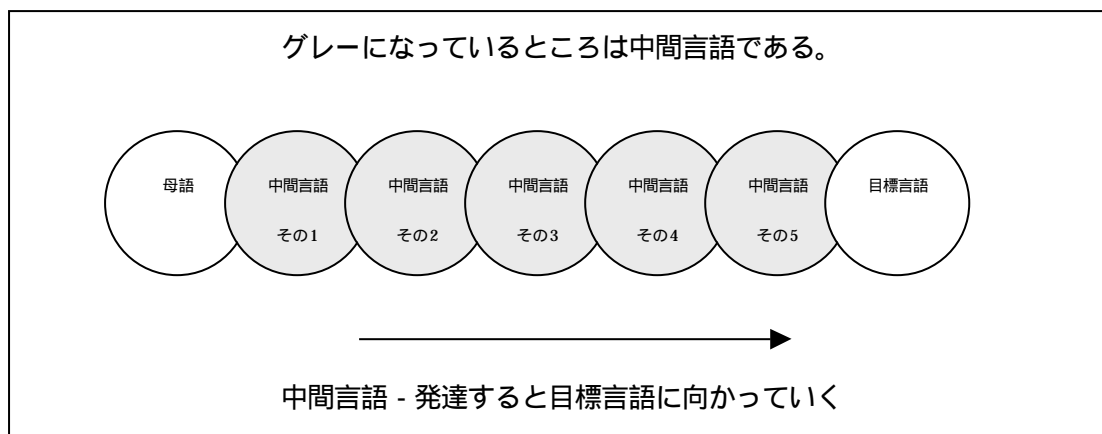
習得の段階に応じて変化していく学習者特有の言語体系。目標言語との母語とも異なった体系を示していることからセリンカー (L.Selinker) によって命名された。<sup>1</sup>

分かりやすく言うと中間言語はその学習者の独特な体系である。その時点だけのもので、常に変化しつつある。

下の表は中間言語を表す。

---

<sup>1</sup> 迫田 (2002) P.214



この表は、時間とともに学習者は発達する一方、その発達はおとんどの場合中間言語から目標言語への移動ではなく、中間言語から次の中間言語までしか進まないことを示している。そのプロセスでは少しずつ目標言語へ向かって進んでいくが目標言語に到達する事はなかなかない。

中間言語はその時期に、その学習者独自のものである。母語が英語の人はある特定の部分で間違いやすいとは言えるかもしれないが、母語が英語の人だからその人の中間言語はこのようなものだと言うことはできない。中間言語はまったく個人の体系である。ある特定の時点において、その学習者に特有の体系なのである。その中間言語はユニークなものと思われる。

Selinker (1972) によるとわずか 5%の言語学習者しか流暢な話者になることはできない。その他の 95%の人たちはなぜ流暢に話せるようになるまで成長しないのだろうか。なぜ中間言語の状態で止まるのかその要因と見られるのは「化石化」である。これは中間言語理論の主要な概念である。化石化という現象はその学習者の言語能力が中間言語のある段階で止まり固まってしまうことである。

迫田 (2002) の化石化に対しての定義を見ると

「第二言語学習者の習得過程においてある項目や事柄が誤用のままが進まないでいつまでも誤用として残ってしまう現象。」となっている。<sup>1</sup>

どの論文においても、Selinker の示した次の 5 つが化石化の原因と見られているようである。

5 つの原因

<sup>1</sup> 迫田 (2002) P.208

- \* 言語転移
- \* 学習ストラテジー
- \* 訓練上の転移
- \* コミュニケーション・ストラテジー
- \* 過剰一般化

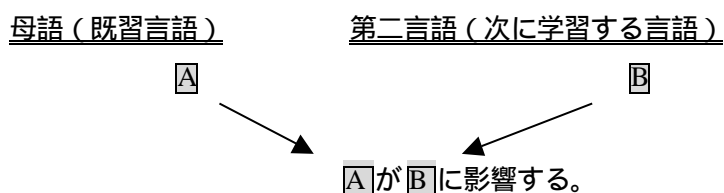
この5つは音声、文法、語彙、表現などのいろいろな場面で観察される。学習者にその誤りを直すための訓練をさせても、化石化された部分は消えない。修正に成功したように見えたとしても、学習者にストレス、不安などの状態を与えるとその化石化された部分が再び現れてしまう。95%の学習者が流暢な話者まで成長しないのはこのためではないのだろうか。

一つ注意しないといけないポイントがある、それはエラーとミステークの違いである。ミステークとは、心理的な原因によりおこる。これはネイティブも学習者も同様におかしてしまうものである。つまり「多くの場合は正しく言えるが、体調が悪かったり、緊張したりしてうっかり言い間違えてしまう、その時だけの誤用<sup>1</sup>」である。他方、エラーとは、中間言語のためにおこる現象であり学習者の誤ったルールによってひきおかされる。「第二言語学習者が、その事柄に関しては一貫して間違ってしまう言語的な誤り<sup>2</sup>」である。先に述べた5つの原因を調べるとき、ミステークではなく、エラーについて調べなければならない。

しかし、言語転移、過剰一般化、訓練の上転移、学習ストラテジーとコミュニケーションストラテジーとは一体どういうことであろうか。

### 言語転移

言語転移の現象は、学習者が母語や既習の言語の規則を第二言語や次に学習する言語(目標言語)に対して用いることである。



<sup>1</sup> 迫田 (2002) P.219

<sup>2</sup> 迫田 (2002) P.207

言語転移には良い転移と悪い転移とがある。良い転移とは母語や既習の言語の規則を目標言語に用いて、文法的に正しい発話となる場合で、これを**正の転移**と呼ぶ。悪い転移とは母語や既習言語の規則を目標言語に適用する事によって誤用が生じる場合で、これを**負の転移**と呼ぶ。

例えば

正	A	英	I love you.	←	SVO
	B	中	Wo ai ni.	←	SVO

負	A	英	Everyday I go to the park.					
	B1	日	毎日私(は)行きます公園。	×	A→	B	=	負
	B2	中	Meitian wo qu gongyuan.		A→	B	=	正

### 学習ストラテジー

学習ストラテジーというのはその学習者が自分の言語能力を高めるために取る行動である。

学習ストラテジーと見なすことができる行動

- \* 単語カードを作ること
- \* ノートを取ること
- \* ネイティブと交流すること
- \* 覚えるための韻(語呂合わせ)などを作ること

Selinker (1972) によると学習ストラテジーはその学習者の文化とも関係がある。だから、その学習者の文化で歌うことが大切なら、その学習者は学習ストラテジーとして歌うことを使うかもしれない。

また、学習ストラテジーは意識している場合も意識していない場合も働いている。

### 訓練上の転移

訓練上の転移とは次のシナリオのようにその言語を勉強している間に先生や教材から、言語発話に悪い影響を受けることという。

ある先生は授業中生徒にも、目上の先生にも敬語を使わず同 *plain form* を使う。

「終わったら、持ってきて」 (生徒に)

「授業終わった？」

(目上の先生に)

このような状況に影響された生徒は、先生のようなplain form で発話を行うことになる。

### コミュニケーション・ストラテジー

コミュニケーション・ストラテジーとは目標言語について知識が十分でない学習者が自分の不十分な状態を認識した上で、自分が現在使える知識手段の範囲でコミュニケーションを成功させようとして用いる工夫のことである。つまり、自分の知識が足りない時にどうにかして自分の言いたいことを相手に伝えようとするその方法である。

\*言い換えること

\*母語を入れてしまうこと

\*聞き返すことなどの方法

このように工夫することによって、言いたいことは伝わるので、新しい単語を覚える必要がなくなったり、あるいは、その状態から進まなくなるという事態が生じる。

### コミュニケーション・ストラテジーの種類

言い換え (ほかの表現を使用すること)		
i 類似表現	近い意味の単語を代用	例: 「回転寿司屋」 「寿司屋」
ii 造語	自分で話を造る	例: 「回る寿司レストラン」
iii 説明	詳しく説明する	例: 「テーブルの上を寿司が回って、自分でとって食べるすし屋」
母語使用 (学習者の母語を借用すること)		
i コード・スイッチング	不明な部分で母語使用	例: 「出張」 がわからなかったので、business trip です。」と言う。
ii 翻訳	直訳してしまう	例: 「映画が楽しかった」と言い代わりに「映画が私を楽しませた。」と言う。
授助要請 (聞き手の協力によって問題解決させること)		
i 聞き返し	直接的に助けを求める	例: 「意味は何ですか」「もう一度言ってください」などと言う。
ii 身振り	ジェスチャーで助けを求める	例: 身振り・手振りで相手に内容を伝える。
iii リペア	わからなかった部分を繰り返して相手に補足要求	例: 日本人「住所はどこ?」 学習者「じゅ、じゅう...じゅうす?」 相手の発音の一部だけ繰り返しわからない部分を明確する。
回避行動 (相手の発話内容がわからない時に、無視したり、避けたりすること)		
i 回避	その話や表現を用いない	

<sup>1</sup> 迫田 (2002) P.108

ii 話題転換	話題を変換する	自分の発話できる話題に変換する。
---------	---------	------------------

### 過剰一般化

簡単にいうと過剰一般化とは1つの規則を使いすぎることである。すなわち目標言語において、ある場合に有効な一つの規則を類似したケースに適用する、ことによって誤用を生じさせてしまうことを言う。

たとえば

漢字	発音記号	ひらがな
京都	kyo:to	きょ <u>う</u> と

「o:」という部分を「~よう」か「~おう」で書くことを習う。しかし、不規則場合もある。

漢字	発音記号	ひらがな
多い	o:i	お <u>う</u> い ×

「おうい」と書いてしまう。正しくは「おおい」である。

広い	広かった	
きれい	きれかった	×

食べる(たべる)	食べない(たべない)	2グループ
歩く(あるく)	歩かない	×
		1グループ(歩かない)

### . まとめ

中間言語とは、その学習者の目標言語に対する理解と言語能力の発達の程度を示すものであり、その時点における、その学習者独自のものである。また、化石化とは言語発達が止まってしまう一つの原因である。さらに化石化の原因として

- 言語転移
- 訓練上の転移
- 学習ストラテジー
- コミュニケーション・ストラテジー
- 過剰一般化

が挙げられる。

エラーを分析すれば、言語を教える人にも、習う人にも役に立つ。先生にとって役に立つことは、学習者の化石化された部分を分析して、どのようなシラバスなどを使うべきかわかることである。また、学習者に役に立つ点は自分がどのような誤りをおかすかを気をつけるようになることである。私はこのレポートを書きながら、自分の中間言語に気がついた。私は知らない言葉を調べるより、言い換えることをしてしまう。今まで「自分の言いたいことはちゃんと伝わっているから大丈夫だ」と思っていた。しかし、こういう行動が化石化の原因となるを知り、これを止めようとする行動を使い始めた。

この中間言語を使っているあなた、このレポートを読んで、「流暢になるまで頑張らなきゃ！」と思っただろう、中間言語を意識しながら、そのゴールを目指してください。私も、その流暢な日本語を目指して、頑張っていきたい。

#### 参考資料

迫田久美子、「日本語教育に生かす第二言語習得研究」、アルク、東京、2002

レスリー・M. ビービ、「第二言語習得の研究 -5 つの視点から」、主株式会社大修館書店、東京、1998

Jack C. Richards (ed.),「Error Analysis – Perspectives on Second Language Acquisition」, Longman, London, 1990